

「身体拘束」を考える＝青野由利

毎日新聞 2017年7月22日 東京朝刊 [土記](#)



息子の遺影を置いて、精神科病院での unnecessary な身体拘束をなくすよう訴えるマーサ・サベジさん(左)＝東京都千代田区で2017年7月19日午後4時3分、山田泰蔵撮影

なんともやりきれない記者会見だったが、小さな光も見えた。

ニュージーランド人のケリー・サベジさんが5月、神奈川県内の精神科病院で身体拘束された後に死亡した。27歳。母国で日本語と心理学の学位を取った後、九州の小中学校で英語を教えていた。

子どもたちにも慕われていたのに、なぜー。

会見では、母親で地震学者のマーサさんとケリーさんの兄、精神科医療に詳しい杏林大教授の長谷川利夫さんらが話した。遺族によると、経緯はこうだ。

ケリーさんには双極性障害(そううつ病)があった。関東に住む兄の家に滞在中に症状が悪化。4月末に措置入院となり、すぐに両手両足、腰をベッドに拘束された。身体拘束は続き、10日後に心肺停止。転院先で亡くなった。

病理解剖で死因は特定できなかったが、体を長時間動かさなかったことで血栓ができ肺塞栓(そくせん)症を起こしたエコノミークラス症候群の可能性が高い、と遺族はみる。

「弟はすでに落ち着いて、協力的だったのに」。付き添った兄の無念さが伝わる。

一方で注目したいのは、会見が今回のケースを告発するだけの場ではなかったことだ。「残念ながら弟は例外ではないだろう」と兄は語った。

実際、厚生労働省の調査では2014年6月末に精神科で身体拘束を受けていた人は1万682人。10年前に比べ倍増している。長谷川さんが11精神科病院にたずねた調査では、身体拘束の平均日数は96日にも及んだ。「数時間から数十時間程度」という海外の実態とかけはなれている。

そもそも、日本は精神科病院の入院患者が多く、14年の調査では28万9000人。うち18万5000人が1年以上入院していた。驚くような数だが、その現実が知られているとは思えない。

身体拘束が肺塞栓症に結びつきやすいことは論文にもなっている。会見では同様の事例が遺族らから複数紹介された。なぜ、こんなことが起きているのか。マーサさん、長谷川さんらは、「精神科医療の身体拘束を考える会」を発足させ、こうした事例をなくすために活動する、という。

マーサさんは東大地震研究所にも客員教授として何度か長期滞在した経験がある。「日本で研究を始めたのは息子たちの影響。日本の地震観測は世界トップで、実り多い共同研究ができた」

そうした最先端とは対照的な身体拘束。数も時間も国際水準まで減らしていければと思う。(専門編集委員)